

お気楽  
精神科医の  
頑張らない

人生のスヌメ 第二十四話

# 性格は人間関係で変わる

福島淳 イラスト福島マゲリータ



性格とはなに？と改めて考えると、どんな定義を持ち出されても何かムスカイところがあって、どこに来ないところが多いのではなからうか。

精神科医の切替辰哉氏によれば、CHARACTER(性格)とは、元来ギリシア語の「刻み込まれたもの」彫りつけられたものに由来し、標識や特性といった意味を有するそう。簡単に言えば、その人固有の思考、言動パターンと言えるだろう。

しかし、「性格」はもっと多面的に見た方がよいと思われるので、もう少し視野を拡げてみよう。

人は日常生活の中で付き合いがかねばならない他人の性格を、あの人はどういつ性格の人はああいつ性格とかとりあえず分類する傾向にある。そしてその予測によって自分の言動を判断していく。しかし、現実には思い通りにいかないのが圧倒的に多い。

例えば、喜ばれるだろうと思っただけにも関わらず、まるでしてもらって当たり前のように顔をされたり、逆にいれぐらいに許してもらえないだろうと思っただけで意外にも激怒されたりと、実にさまざまな失敗を繰り返しているのが現実だ。更に最初はそれほど気にならなかったことが時間を経つにつれて悩み種になっくこともある。

だからこそ、他人や自分の性格を知ろうと、いろいろな方法を模索するのである。心理学の本が注目を浴びたり、血液型による性格判断や、自分と人の性格の絡みで決まってくる運勢、まですべて知ろうとする

のかも知れない。そんな情報が繰り返して雑誌などで採り上げられているのを見ればその需要の多さが判るといってもいい。

人は予測通りには動かない。逆に、人が予測通りに動くならば、ある意味で心理学は日常生活を送る上で全く不必要、ということになってしまう。自分でさえも予測通りには動いてないのに、まして他人の言動が予測できる筈もないのである。

日常の言動に深く関わっている、この捉えどころのない「性格」といふものを、さらに人間関係の面から考えてみよう。

仮にここで例にする二人を「友達以上恋人未満」の関係で付き合いしている男女としよう。会って楽しいが彼女は彼にとつただの友達。彼も彼女にとつと同様の存在だ。

しかし、彼はそのつちに、彼女が自分にとってどれだけ重要な存在になっただかを意識するようになり、そこで正式な交際を申し出ることにした。ちょうど彼女も彼の存在を意識し始めるようになっただころだったので、晴れて交際はスタートとなる。世の中によくあるパターンだ。

これが登場人物の設定であるではこの話で彼と彼女の性格に焦点をあわせてみよう。

まず、1目の考え方はこうだ。彼も彼女も男女の付き合いに関して慎重なところがあり、そのために、お互いただの友達といつことにしておき、重大な結論を下すことを延ばし延ばしにしてきた。結局、時間の経過と共にお互いの人間性を知る事となり、人間関係がより深いものになっただ。

しかし、「目的の考え方ではどう捉える。

この2人は付き合っていくうちに人間関係が途中で変化した。その変化によって、本来は他人とは深く付き合い合わないといふ、お互い疎な人間関係しか結ばなかった人間から、1人の他人を真剣に愛することのできる人間へ、変化をおこさせたのではあるまいか？

間違えてはならないのは、2人にもとも隠れていた本来の人間性が出てきたのではなく、あくまで人間関係によってお互いの人間性(性格)が変化したということだ。

1)目的の考え方によれば、「性格は簡単に变化するものではなく、人間関係の中で普遍的なものである」という見方になる。後の考え方は、性格は人間関係の中である程度流動的なもので、それぞれの人間関係の中で性格は変動する」という見方である。

性格という人間関係の中で形成されてきたものは人間関係の中でその形を変えていくと捉えた方が自然であろう。

人間関係の中で性格が変化するならば、宍とA氏との人間関係が宍とA氏の性格を定める。そうすると、別のB氏が宍の性格をどう捉えるかは、A氏と違って当然だろう。例えば宍は「言った」とは言いやりたくない事はやってしまうというタイプで、A氏が宍についてそれ以上のことを知らないならば宍を傲慢な性格と判断するかも知れない。

しかし、B氏はA氏の知らない宍の一面を知っている。これは言い分けないで、「やっほいしはけな」とは決して言動に移さない性格を知っていたので、単に気が強いくらいにはしか認

識していない。

つまり、B氏には宍の我慢して言わなかったこと、やらなかったことが見えるが、A氏には見えないのだ。

結局、それぞれの人間関係の中で性格は決められ、客観的な視点から見た性格など存在しない、としても過言ではない。人間の性格にはいろんな面がある。

例えば相反する性格傾向とみえる神経質と鈍感の両方を、何らかの形で誰しもが持っているものだ。もし、その鈍感さのせいで他人を傷つけたとしよう。だがそれだけで自分は最低な性格だなどと、一方的に悩む必要はない。全ては相手があつての出来事であり、お互いがお互いの原因になっていることが少なくない。一方だけが完全に問題を抱えている場合もある。

こうして、誰しも自分の抱える矛盾に悩んで生きているのかもしれない。性格は日々、それぞれの人間関係の中で変化し続けるものだから。

